

3年3組の実践

天池 裕聖

1. 3年3組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の活用

(1) 単元について

今年度の3年生における総合的な学習の時間は、会話AIロボット（以下ロボット）を題材として進めていった。ロボットとは、会話というコミュニケーションと最新のAI技術、ロボティクスを掛け合わせて生まれたものである。会話AIによって、話し手の好みなどを学習し、最適な返答をその場で生成するため、自由に会話を楽しむことができる。また、「シナリオエディター」というツールが存在し、プログラミングで話してほしい内容やロボット自身の表情を設定することで、ロボットとの会話を自由に設計することができるというものである。モジュールやサンプルルールというお手本のプログラムがあるため、3年生でも少し高度なプログラムを使用してプログラミングすることも可能となっている。

本題材においては、会話ロボットの特色について調べ、プログラミングを活用してロボットを操作することを通して、関わる人々の思いや願いに気づき、ロボットを有効活用してたくさんの人々を笑顔にしたという思いをもち、行動に移していくことをねらいとしている。

ロボットと初めて出会う場面では、たくさんの会話をしていた（資料1）。その後、附属小学校のこ

とを知っているようにプログラミングされたロボットとそうでないロボットを比較し、プログラミングの存在に気付かせた。そこから、プログラミングについて学ぶ学習が始まった。



資料1 初めてロボットと話す様子



資料2 プログラミングロボットを試す姿

プログラミングロボットやタブレット内のアプリを活用することで、プログラミングに関する情報を集めていった（資料2）。情報を集めていく中で、シナリオエディターを使うことでロボットをプログラミングできることが分かったので、そこからは、シナリオエディターを活用する学習へと展開していった。最初は学級で1台のロボットであったが、次第に自分たちで直接操作したいという思いが強くなったので、ロボットの会社にお願ひし、各班1台のロボットを準備し、進めていくこととなった。各班、自分たちの好きなシナリオを作り始め、お互いに試し合う中で、ロボットの楽しさに気付いていった（資料3）。そこから「自分たちで作ったシナリオでみんなを笑顔にしよう」という学習のゴールが生まれた。

ゴール設定後は、みんなの対象を全校児童に絞り、ロボットを各教室に置いてきて、会話を楽しんでもらうというイベントを行うことにした。各班で1つの学年を担当し、どんなシナリオにするとよいか話し合い、作成するシナリオを決めていった。シナリオが決まると実際に班で協力しながらプログラミングを



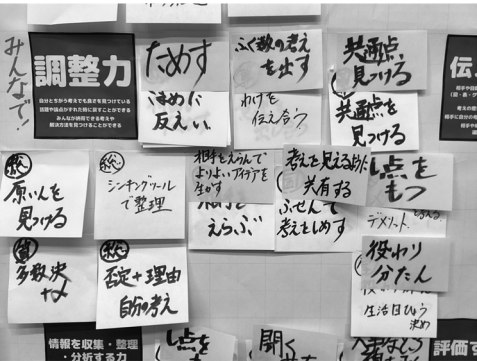
資料3 シナリオを作成している様子

していった。このシナリオ決め、シナリオ作りで行った「試行」・「習得」の詳しい実践については次項で述べる。シナリオ作りと並行して、イベントへ向けた準備も行った。シナリオ、イベント当日の進め方などの準備が終わると、各教室へ告知に行き、イベントを行った。体験した児童にはアンケートを記入してもらったので、そのアンケート結果をもとに今後の学習を展開していく予定である。

(2) 試行・習得・活用

「習得」の場面を中心に、調整力に着目して取り組んだ実践を紹介する(資料4)。その前に、「習得」につながる「試行」の実践について述べていく。

まず、調整力の学習方法の中でも「試す」「役割分担」「考えを見えるように共有する」「相手を選んでよりよい考えを生かす」の四つに絞って「試行」した。この四つを選んだ背景として、シナリオエディターという学習内容に適した方法だということと本学級の児童の実態ということの二つが挙げられる。特に「試す」という方法は、こまめにロボットに反映させながら活動を進めていくシナリオ作りにおいて、最も適したものだと考えられる。それ以外の三つに関しては児童の実態から選択した。これまで班で話合いの活動を行うと、自分の考えを押し通そうとする児童や熟考せずに多数決で決める班が多く見られた。児童の頭の中には、とりあえず一つの考えを選ばばいいという意識が強く、お互いの考えに意見や質問を出し合って、よりよい考えを練り上げていくという意識が弱かった。そこで、話合いの中で、自分と違う考えでもよさを見つけ、それを踏まえてみんなが納得できる考えや解決方法を見つけることができるようになるために、これらの学習方法を選択した。



資料4 調整力の汎用化された学習方法

どんなシナリオを作成するか決める場面では、「役割分担」を意識させることで、司会係、時間係、記録係の三つの役割に分かれて話合いを行っていた(資料5)。

記録係はシンキングツールを用いながら話合いの内容を整理していた。シンキングツールの活用は、教師が意図せず、児童自らが選択して使用していた。このシンキングツールの活用も「考えを見えるように共有する」の一つである。その他にも、「共有する」手段として、学習支援アプリで情報を共有する、黒板に自ら書くことで共有するという二つの方法を学級全体で共通認識として持っていた。作成するシナリオが決まると学習支援アプリで情報を共有する班が現れた。最初は、シンキングツールを活用して

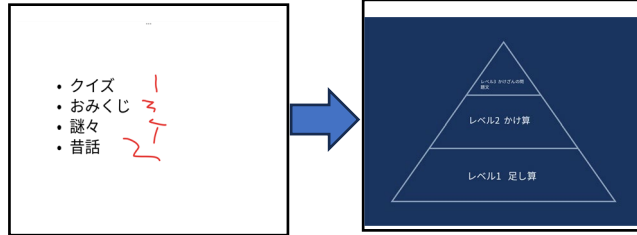


資料5 役割分担して話し合う様子

いた班は1つだけであったが、その提出された情報を見て、シンキングツールを真似する班が出てきた

(資料6)。「よりよい考えを生かす」ということを意識して取り組めた結果だと言える。

シナリオ決めの場面のふり返しにおいて、最初は「いつもより時間がかかって大変だった」と話す児童もいたが、何回か試していくうちに、「言い争うことなくスムーズに考えをまとめることができた」



資料6 他の班の整理の仕方を生かす姿

「班の考えを組み合わせることができた」というように「役割分担」のよさを実感する児童が増えていった。一方で、「考えを見えるように共有する」「相手を選んでよりよい考えを生かす」ということについては、学習支援アプリでの共有では、見る人が限られてしまい、それらの学習方法のよさを感じるまでには至らなかった。

そこで、シナリオを作る場面において、「考えを見えるように共有する」「相手を選んでよりよい考えを生かす」ことをより意識させるために、黒板に「困ったこと」と「その解決策」を書くスペースを設けた。最初は自分たちのシナリオを作ることに集中しすぎてうまく活用できていなかったが、困ったことはあるか尋ねると、「そういえば・・・」と思い出し、少しずつ黒板に書く児童が現れた。ある班が、「シナリオを作ったのに反映されない。」と書くと、それを見た他の班の人が解決策を黒板に書き、詳細を学習支援アプリに提出した。困っていた班はそれを見て、具体的にどういふことをすればいいのか聞きに行っていた（資料7）。自分の班だけでは解決できなかったことも、他のアイデアを取り入れることで解決し、よりよいシナリオにすることができた。他の班でも同じ様子が見られるようになり、この経験をしたことで、困ったときに自ら他の班に聞きに行くなど、「相手を選んでよりよい考えを生かす」を使って、みんなのアイデアを取り入れていこうとする意識が高まっていった。



資料7 よいアイデアを得ようとする姿

このように「試行」を繰り返し行うことで、学習方法を児童に意識させ、次の「習得」へと進めていった。

「習得」においても、シナリオエディターを用いて話し合う時間、困ったことやその解決策を自由に黒板に書くことができるスペースの確保というこれまでと同じ学習環境を整えることで、汎用化された学習方法を児童自らが選択して生かせるようにした。七つある学習方法の中で、四つを意識して「試行」してきたことで、上記四つを生かそうとする場面はいくつか見られた。例えば、「考えを見えるように共有する」「相手を選んでよりよい考えを生かす」である。ロボットをプログラミングで意図的に笑顔にすることができないという課題をある班が黒板に書いた。それを見た他の班は、最初からアイデアをもっていた班はすぐに黒板に書き、まだアイデアがなかった班も自分たちのロボットでうまくいくか試し、うまくいくと分かるとそのアイデアを黒板に書いていた（資料8）。笑顔にできないという課題に対して、モジュールを使う、サンプルルールを使う、ヘルプの使い方の説明を見るという三つのアイデアが生まれていた。一見バラバラに見えるアイデアであったが、よく見ると「{emotion type=laughing}」という文言を入れると笑顔になるという共通した考えであり、それをどこからコピーするかという違いであった。笑顔にできないと困っていた班は、三つの中から自分たちが一番使いやすそうなモジュールから「{emotion type=laughing}」という文をコピーして自分たちのシナリオに取り入れていた。その結果、笑顔にさせたいところで意図的にロボットを笑顔にすることができていた。その後、モジュールのよさに気付いた他の班も文言を少し変えながら、表情をハートにしたり、泣く顔にしたりとシナリオに合わせて、意図的に表情を変えていた。「自分の班が困ってもみんなに聞けば、アイデアを出し合って、課題を解決することができるからよかった」とふり返る



資料8 考えを見える化している姿

児童がいたように、シナリオエディター活用時には、適切な方法を選んで学習を進める姿が見られた。

また、「試す」という学習方法を自ら選択して使っている児童もいた。他の班にシナリオを試してもらった場合、今のシナリオでは楽しんでもらえないと気づいたA児は、シナリオの改善を試みている。そして少し修正できると、自分たちだけで試すのではなく、他の班から一人呼んできて、その人に修正したシナリオを試してもらっていた。これまでも多くの児童が自分たちの作ったシナリオを自分たちで試すことはしていた。ただ、他の班に試してもらおうという発想はなく、A児が初めてであった。このことに気づいた他の児童もそれを真似するようになった。A児の働きによって、「試す」がより相手意識をもったものへと変化し、価値づけられた瞬間であった。

しかし、それらの学習方法が学級に定着しているとは言えず、「習得」の段階で自ら生かせるのは一部の児童に限られていた。

2. 成果と課題

「試行」・「習得」の段階において、明示的指導によって繰り返し学習方法を活用したことで、自ら学習方法を選択して使っていこうという意識が高まったことは大きな成果である。特に「役割分担」に関しては、多数決でパッと決めていたものが、総合的な学習の時間に繰り返し「試行・習得・活用」してきたことで、どの教科においても話合いの活動のときには自然と役割分担し、情報を整理しながら話合いをすることができるようになった。また、「視点をもつ」に関しても、メリット・デメリットを考えたり、共通点・相違点を意識して考えたりする姿が増えてきた。

一方で、それらの学習方法の活用が一部の児童に限られており、学級全体に定着していないという課題も見られる。要因として考えられることは次の二つである。

一つ目が、教師が「試行」と「習得」を明確に分けることを意識しすぎたことである。「習得」において、児童が自ら選択することを大事にしすぎるあまり、うまく学習方法を活用している児童がいても褒めて広めることができなかった。教師の意識の中に、促しによって活用したものは「試行」になると考えていた部分があったからだ。しかし、それでは繰り返し活用するのは一部の児童に限られてしまい、学級に広がっていかないことが分かった。それぞれの段階を明確に分けて考えるのではなく、1時間の中であっても「習得」できている児童がいたら褒めて広めることで、その他の児童には「試行」を促す。それを繰り返すことで、少しずつ「習得」の段階の児童を増やしていく。1時間の中に「試行」と「習得」が混在することを許容する柔軟な思考が必要であった。

二つ目が、適切な学習方法という意識が弱かったことである。特に「考えを見えるように共有する」「相手を選んでよりよい考えを生かす」に関しては、とりあえずたくさん使うことで慣れていけるようにしたが、児童はシナリオを作成する場面においては適切な方法と感じておらず、必要感があまりなかった。そのため、教師に促されて使うことはしていたが、自ら選択して繰り返し活用することはあまりなく、学習方法の定着には結びつかなかった。繰り返し活用して身につけていくためには、その学習場面に合った適切な学習方法という視点が必要不可欠である。

今後は、学習場面に合った適切な方法を意識しながら、活用している姿が合ったらタイムリーに褒めて広めていくことで、学級全体に学習方法を定着させていきたい。

4年1組の実践

田中 篤

1. 4年1組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の活用

(1) 単元について

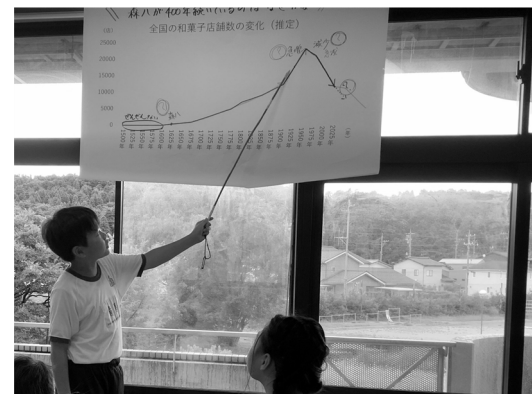
本単元は、金沢の老舗和菓子店森八の人々と協働しながら、和菓子の魅力や課題に気づき、和菓子文化を未来へつなぐために自分たちにできることを考える学習である。児童が地域文化を自分のこととしてとらえ、伝統の継承に粘り強く関わろうとする姿勢を育むことをねらいとしている。

本単元は、以下の3つの小単元で構成されている。まず導入場面となる小単元1では、和菓子や森八の魅力に浸ることを重視して学習を展開した。多くの児童が和菓子に親しみをもっており、日常的に食べている様子も見られたが、一方で「あんこの甘さが苦手」「どれも同じ味に感じる」といった声もあり、和菓子に対する受け止め方には個人差があった。そこで、森八の職人による上生菓子づくり体験（資料1）や工場見学、氷室まんじゅうの食べ比べなど、実際に金沢の和菓子文化にふれる活動を多く取り入れ、児童の興味関心を広げていった。こうした体験によって和菓子への愛着が高まったタイミングで、和菓子店の店舗数の推移を示すグラフを提示し、「和菓子屋は減っているのに、森八が400年も続いているのはなぜだろう」という問いを設定した（資料2）。児童はインターネットを活用して情報を収集したり、副社長から直接話を聞いたりする中で、①素材や味へのこだわり、②歴史を受け継ぎたいという思い、③時代に合った商品開発、といった3つの観点に着目して森八のすごさをとらえていった（資料3）。

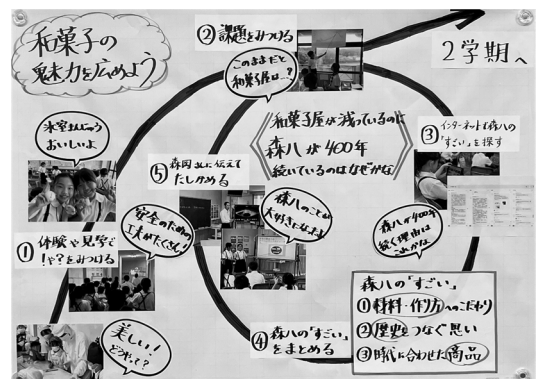
続く小単元2では、和菓子を未来につないでいくために自分たちにできることは何かを問いに据え、探究を深めていった。児童はこれまでの学習を通して森八の魅力を理解してきたが、本店を見学した際に「すごいお店なのに、お客さんが思ったより少ない」といった気づきが出た。そこで、これまでの体験をふり返り、「400年続く森八を未来につなぐために、工場をテーマパークにしよう」という大課題を設定した。児童は人気のある他のテーマパークの工夫を調べ、共通点として「オリジナルの商品づくりができる」「写真映えするスポットがある」「試食体験がある」などの要素に着目した。また、子どもが楽しめる内容にするため、クイズやゲームなどの要素と組



資料1 上生菓子づくり体験の様子



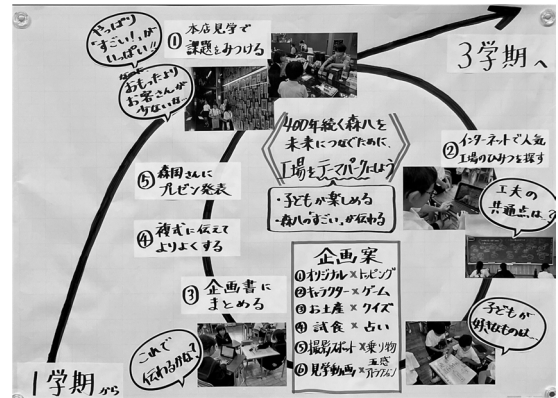
資料2 和菓子店舗数の推移グラフ



資料3 小単元1の流れ

み合わせてアイデアを練っていった。こうして、オリジナル×トッピング、キャラクター×ゲームなど、6つのグループに分かれて企画を立案した。さらに、児童は他クラスや他学年に自分たちの企画を提示し、評価やアドバイスをもらうことで、自らの企画を見直し、ブラッシュアップを図った。これらの改良を経た企画案を、森八の副社長にプレゼンテーションし、魅力度と実現度の観点から評価を受けた（資料4）。

小单元3では、この評価結果をもとに、実際に工場のテーマパーク化に向けた取り組みを進めていく場面へとつなげていく。



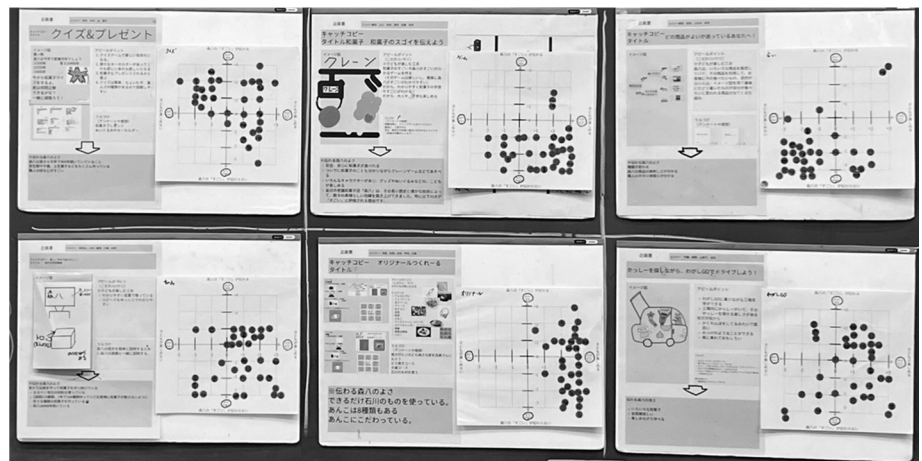
資料4 小单元2の流れ

(2) 試行・習得・活用

聞く力における「試行」・「習得」・「活用」の場面について述べていく。本時では、聞く力（自分の考えと比べながら聞いている姿）において、「ちがう立場の意見を聞く」という学習方法の「習得」を中心に据えて授業実践をした。そこで、ねらいを相手の意見を自分の考えと比べながら聞き、問い返したり要点をとらえたりすることができるように設定した。

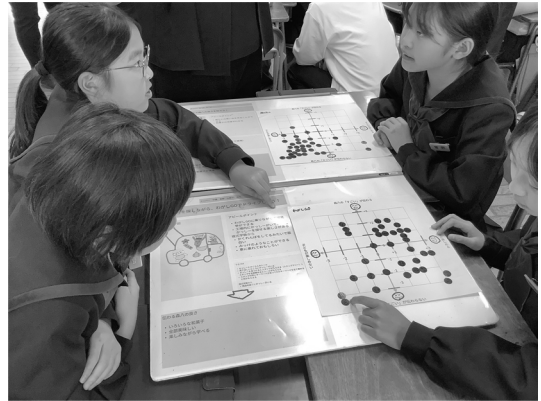
この学習に先立ち、児童は複式学級との交流を経験している。これまでグループで考えてきた企画案を企画書としてまとめ、それを使いながら説明を行った。説明後、複式学級の児童から、「①子どもが楽しめるか」「②森八のすごさが伝わるか」の2軸で構成した4象限マトリクスに基づいて評価をもらった。この評価結果に対して、児童は「やった！高評価だ！」「えー、なんでこの位置なの？」といった反応を見せていた。喜ぶ姿だけでなく、評価に落ち込む姿も見られたが、そこで「どうしてそう思ったのか、理由を聞いてみよう」と促したことで、「ちがう立場の意見を聞く」という学習方法の試行が行われた。実際に理由を聞くことで、「ゲームができて楽しんでもらえたけど、森八のすごさが伝わってなかったね」「どんなトッピングができるか、イラストを入れてもっと分かるようにした方がいいかも」といった、企画の見直しにつながる発言が見られた。児童自身が、異なる視点を受け入れることで考えを再構築できたという価値を実感した場面である。

こうした経験を踏まえ、本時では習得の場になるよう導入を工夫した。まず、5年生には4年生の企画書だけを見てもらい、4象限マトリクスによる評価を実施した。4年生にはその評価結果（資料5）のみを授業の導入で提示した。「えー！？」「複式のアドバイスも入れてより



資料5 4象限マトリクスによる評価結果

よくしたのに」という戸惑いの声があがると同時に、「理由を聞いてみたい」「もっと森八のすごいを伝えな
いといけないな」といった発言も自然と生まれた。あるグループでは、評価の高かった5年生と、低かった
5年生それぞれに注目し、「どちらからも理由を聞きたい」と相談し合っていた(資料6)。ここでは、自分た
ちの企画をよりよくするために、誰に聞けばよいのか、何を聞けばよいかを真剣に考える姿が見られた。これ
は、「ちがう立場の意見を聞く」という学習方法が、教師主導ではなく、児童自身によって意味付けられ、選
び取られた場面であったといえる。



資料6 グループで相談する姿

実際に5年生を教室に招き交流が始まると、児童が
様々な聞く力を発揮する姿が見られた。例えば、「あ
ー、うんうん。」といった反応を返しながらかいて
いる児童は、相手の意見に納得していることを態度で表
していた。また、相手が伝えたいことを理解しようと
前のめりになって聞く姿勢や、相手の目を見て頷きな
がら聞く様子も見られ、話し手がもっと話したいと思
えるような受け止め方ができていた。これらの聞き方
は、国語科で学んだ聞き取りメモのくふうの単元とも
つながっており、学習方法が「活用」されている場面
と見ることもできる。さらに、ある児童が移動しよう



資料7 問い返す姿

とした5年生を引き留めて、「どこがよかったですか?」「どうしたらよいと思いますか?」と、具体的に
問い返したり(資料7)、そのアドバイスをすぐにふせんにメモをしたりする姿も見られた。このように、
児童が自ら問い返し、要点を整理しながら異なる意見を取り入れていく姿は、本時のねらいに即したも
のであった。

交流後には、聞いたアドバイスをメモしたふせんをもとに、企画を見直す時間をとった。ふせんを整理
しグルーピングする姿やなるほどと思った意見を共有し「和のトッピングだけに見直した方がいいのか
な」などの話し合いをする姿が見られた。これらの姿から、聞くことが単なる受け身の行為としてではな
く、主体的に異なる考えを受け入れることで、考えが深められる学習方法に変化していると考えられる。

2. 成果と課題

本単元では、和菓子文化を未来につなぐというテーマのもと、児童が森八の工場のテーマパーク化に取り
組んできた。その過程において、児童がよりよい企画とは何かを問い続け、他者と対話しながら考えを
深めていく姿をめざした。特に、本時では聞く力を育成するために、「習得」の場面を意識して授業を構
成した。

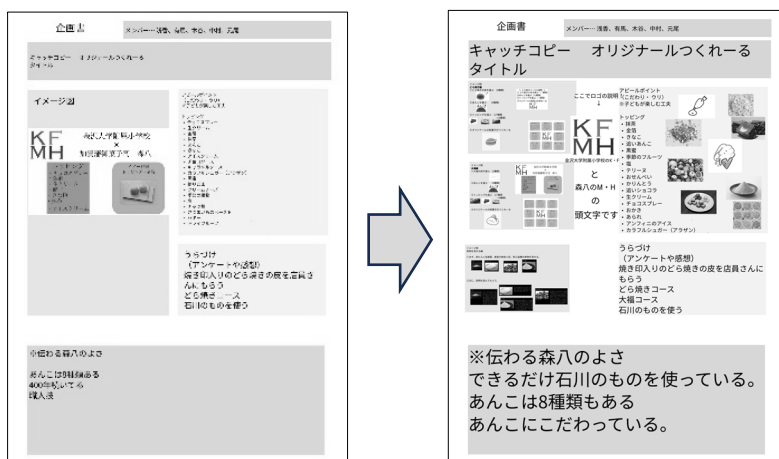
成果として挙げられるのは、4象限での評価結果を提示したことで、児童のどうしてこうなったのか知
りたい、聞きたいという思いを自然に引き出せた点である。これにより、児童の思考を聞く力に焦点化す

ることができた。また、複式学級との交流、5年生との交流と、段階的に学習の場を構成したことで、これまでに触れてきた聞く力の学習方法を「活用」する姿が見られた。学習方法についても、「ちがう立場の意見を聞く」といった抽象的なものから、「聞き返す」「大切なことをメモする」といった、より具体的な方法として、児童と共有することができた点も成果といえる(資料8)。実際、よりよい企画をめざし、くり返し交流をすることで企画書も改良されてきた(資料9)。



資料8 児童と共有した学習方法

一方で、課題も明確になった。「習得」の場面では、本来、児童が複数の学習方法から目的に応じて適切なものを選び取ることが重要である。しかし、今回の「習得」の場面では、学習方法が「9つの資質・能力」ごとに1つずつしか提示されておらず、選択するという意味では十分ではなかった。そのため、本時を「問い返す」という学習方法を全員が試行できる場面と位置付け、より意図的に取り組ませてもよかつたのではないかと考える。また、「ア



資料9 企画書の変化

ドバイスをメモする」という基本的な聞き方にとどまらず、「問い返す」や「聞きながらメモを分類する」といったより高度な姿を、全員に求めていくことで、より聞く力を高めることができる。具体的にどのような力を児童に身に付けさせたいのか、そのイメージを教師が鮮明にもった上で、「少し欲張って」取り組むことで、児童の力が伸びていくのだと実感した。

さらに、今回は交流相手を教師が設定したが、次の小単元3においては、企画を実現する過程で誰に聞くか、どうやって聞くかといった学習方法を、児童自身が計画できるようにしたいと考えている。自分たちの問いをもとに、必要な情報を得るための相手や方法を自ら選び取ることができれば、より一人一人が自分のこととして企画を進めていくことが可能になるのではないかと考えている。

今回の授業を通して、「教師としての出場の在り方(関わり方)」について見つめ直す機会となった。「習得」の場面では、児童が自ら学習方法を選び、活用していくことが求められる。一方で、その力を効果的に育成するためには、教師による学習の展開や資料の提示の工夫も不可欠であると実感した。また、「習得」の場面であっても、全体に広めたい姿については、その場で価値付けを行い、全員で実際に「試行」してみることが、「9つの資質・能力」の定着にとって重要である。児童にどのような力を付けたいのかを明確にし、それを具体的な姿として教師自身がイメージしながら、「少し欲張りながら」取り組むことが、結果的に児童の学びを豊かにしていくことにつながると改めて感じた。だからこそ、教師が児童の姿に応じて柔軟に関わる出場の在り方を持つこと、すなわち、いつ・どのように関わるかを見極める目を養うことが、これからの授業づくりにおいてますます重要になっていくと考える。

複式学級の実践

豆野 元春

1. 複式学級における9つの資質・能力発揮のための学習方法の活用

(1) 単元について

今年度の複式学級では、金沢市におけるインバウンドについての学習を進めていった。本題材においては、金沢市の冬におけるインバウンド事情について知り、市観光協会がもつ思いや願いに気付くとともに、金沢市の冬の魅力について多様な方法で情報を収集・整理・分析することを通して理解を深め、それらを海外の人に向けて広げるための企画を立案し、実現に向けて計画を進めていくことができるようになることをねらいとしている。

1学期は、まずそれぞれの児童がもつ金沢に対する印象を出し合った。すると他市出身の児童が「(石川県内の)他の市と比べて、金沢市には外国人がとても多い気がする。」と述べ、他の児童からも「たしかにそうかも。」「なぜ多いのだろう。」という意見があがった。そこから1学期の学習課題を「なぜ金沢には多くの外国人が来るのか」と設定し、インターネットや観光地でのインタビューで情報を収集し、それらを整理・分析することを通して学習課題に対する自分たちの答えを探した(資料1)。その結果、金沢がもつ歴史的・文化的な建造物や豊かな食文化、そして北陸新幹線開通によってもたらされた主要都市からのアクセスの良さなど、様々な要因が絡み合っていることで外国人インバウンドが増加していることに気付いた。このことを通して、児童は金沢がもつ様々な魅力について改めて再認識することができた。



資料1 外国人へのインタビュー調査

2学期は、金沢市を訪れる外国人観光客数の年間推移グラフを提示するところから学習をスタートした。グラフを見ると明らかに冬の期間の外国人旅行者数が少ないことが分かり、児童は「冬に外国人旅行者が少ないのはなぜなのか気になる」や「冬にはよいところが少ないのだろうか」と疑問を抱いていた。その後インターネットを使って冬の金沢の特徴を調べたところ、海鮮・雪吊り・金沢おでんなど、素敵な魅力がいっぱいあることを知り、外国人旅行者が冬の時期にあまり来ない事実に対してさらに疑問を深めていた。その疑問の真相を知るために、児童のアイデアから金沢市観光協会の方に直接お話を伺う運びとなった。そこでは、金沢の冬の魅力が外国人にまだ十分に知られていないこと、春の桜や秋の紅葉などのインパクトの大きさによって冬のイメージが伝わっていないこと、そして市観光協会としても冬のインバウンド需要を高めていきたいと考えて試行錯誤しているという話を聞くことができた(資料2)。そこから児童は冬の金沢にもっとたくさんの外国人旅行者に来てもらうために、「世界中の人を笑顔に！金沢の冬の魅力を知ってもらおう」という学習のゴールが生まれた。そこから児童は、さらに冬の金沢の魅力について情報を収集するとともに、外国人旅行者が何に対して興味をもちどれくらいの情報を知っているのかを調査するために、金沢駅でアンケート調査を行った。自分たちの調べた金沢の冬の魅力について伝えたいことと、外国人旅行者の実態を考慮し、自分たちが外国人旅行者に広めるべきことを導き出した。これらを



資料2 市観光協会の方からのお話

もとに、今後は外国人旅行者に冬の魅力を伝える活動を実際に形にすることをゴールに学習を展開していきたい。

(2) 試行・習得・活用

「習得」の場面を中心に、調整力及び情報を収集・整理・分析する力に着目して取り組んだ実践を紹介したい。その前にそれぞれの「試行」の場面の実践について述べていく。

まず、調整力の学習方法の中から「話し合う順番を確認する」を選び試行した。この学習方法を選んだ背景として、建設的な話し合いを行うための方法や姿勢に関して児童にまだ十分に定着していない現状が挙げられる。本学級は3年生8人、4年生6人の計14人の少人数学級であり、人数が少ない分必然的に一人ひとりが意見を話す場面が多くなる。そのため、自分の意見を相手に伝えることに関しては積極的に行う児童が多い。しかし一方で、相手の意見に傾聴する姿勢が不十分であるため、グループでの話し合いになると意見を出し合うことに熱中してしまい、上手くまとめることができずゴールまでたどりつかないことも多かった。そこで、「話し合う順番を確認する」を「試行」・「習得」・「活用」とつなげていくことで、調整力の下位項目である「みんなが納得できる考えや解決方法を見つけることができる」を身につけていくことができるのではないかと考えた。

2学期の総合的な学習の時間では、必要に応じてグループで話し合う場面を意図的に設けた。例えば、外国人旅行者に冬の金沢についてどれだけ知っているのかや何に興味があるのかについて調査する前に、どんな内容でどんな形で外国人に調査するとよいのかを明らかにするために、それぞれのグループごとで話し合う時間をとった。その際に、「話し合う順番を確認する」という学習方法を全体で確認してからグループでの話し合いに臨ませた。すると、どのグループにおいても最初は話し合いのゴールとそこに至るまでの大まかな道筋を共有していた。その後の話し合いでは、意見を出し合うだけでなく、互いの考えをまとめ、みんなが納得できる形で話し合いを進めようとする意識が見られた(資料3)。この経験から児童の中で、建設的に話し合いができるように調整しようとする意識が高まっていった。



資料3 話し合いの順番を確認する様子

続いて情報を収集・整理・分析する力の「試行」の場面について述べていく。この力の学習方法の中からは「シンキングツールを使う」と「共通点を見つける」を選び試行した。この学習方法を選んだ背景として、児童が集めた情報を整理・分析する力に関してまだ十分に定着していない現状が挙げられる。1学期の総合的な学習の時間では、外国人旅行者がなぜ金沢を訪れたのかについてインタビューし、集めた情報を整理・分析する時間を設けた。しかし、この時は集めた情報をどのように整理すればよいのかが上手く理解している児童も少なく、ただ集めた情報を読み上げるだけの姿も多かった。そこで、「シンキングツールを使う」と「共通点を見つける」を「試行」・「習得」・「活用」とつなげていくことで、情報を収集・整理・分析する力の下位項目である「考えるための技法を適切に選択している」や「集めた情報の共通点・相違点を見つけることができる」を身につけていくことができるのではないかと考えた。

2学期の総合的な学習の時間では、それぞれがインターネットや本などから収集した冬の金沢の特徴に関する情報を整理・分析する時間を設けた。その際に、「シンキングツールを使う」と「共通点を見つける」の2つの学習方法について確認した。シンキングツールに関してはいくつか具体例を提示し、どのような時に適したものなのかを伝え、共通点を見付けることに関しては、互いの集めた情報の共通点を

見付けることで、より信憑性のある分析ができることについて話をした。その後の活動では、児童はそれぞれに合ったシンキングツールを使い、集めた情報をまとめていた（資料4）。その際に互いにシンキングツールでまとめたものを見せ合い、それぞれのまとめ方のよさを感じたり、互いの共通点を見つけて分析に活かしたりすることができていた。

以上のような「試行」の場面を繰り返し行うことで、学習方法を児童に意識させ、次の「習得」の場面へと進めていった。

「習得」の場面においても、外国人旅行者へのインタビューで得た情報をグループで相談しながら情報を整理・分析する場面を設定し、児童が今まで試行して身につけてきた学習方法を自ら選択して活かせるようにした。どの学習方法を活かしていきたいのかを考える時間を設けたところ、今までに何度も試行してきた学習方法である「話し合う順番を確認する」（調整力）と「シンキングツールを使う」や「共通点を見つける」（情報を収集・整理・分析する力）が児童からあがった。しかし、この時に他にも複数の学習方法があがったため、どれもが中途半端に行われる状態は避けたい。そのため、たくさんあがった学習方法の中から、特にこの時間に意識していきたい学習方法を児童自身がしぼることで、集中して取り組めるようにした（資料5）。グループ学習が始まった直後にそれぞれのチームでは話し合う順番を確認する様子が見られた。

この時間の目的は、自分たちが広めたい金沢の冬の魅力と外国人旅行者へのインタビュー結果を見比べ、その中から本当に広めるべきことは何なのかを見つけ出すことであった。そのゴールをそれぞれのチームで確認し、そのうえでどのように進めていくとよいのかをそれぞれ確認をしていた。また、シンキングツールを使って情報を整理し、それを使ってグループで話し合うことで分析を試みる姿も見られた。あるグループでは、一人の児童が主となって情報をシンキングツールにまとめ、その後それを用いてグループで分析を行っていた（資料6）。このグループでは、外国人旅行者がどの観光スポットに興味があるのかについて知るために調べており、整理されたシンキングツールの情報を見ながら、「四高記念公園は行ったことがあると答えた外国人旅行者は少なく、そして興味を示していると答えている外国人も少ないため、広めるべき内容からは外れると思う。」や「冬の兼六園や金沢城に行ったことがあると答えた外国人旅行者はとても多く、なおかつ興味関心を示していると答えた人も多いため、現地に行ってさらに楽しむことができるような、より詳しい情報を広めるべきだと思う。」という内容の話合いがされていた。その際、自身が今までに調べた冬の金沢についてまとめたノートを見直しなが、自分たちが広めたいことと外国人が興味関心があると答えた情報を見比べながら共通点を見出す姿も見られた。これらの様子をその場で全体にフィードバックすることで、他のグループでも取り入れて整理・分析を行う姿が現れていった。

このように、今まで試行してきた学習方法を児童が自分の意思で選んで実行する経験をすることで、活用につながっていくのだと感じた。



資料4 思考ツールを使ってまとめる



資料5 意識したい学習方法の選択



資料6 グループでの情報の整理・分析

2. 成果と課題

児童の実態を考慮し、つける必要がある「9つの資質・能力」とその学習方法について「試行」の段階でくり返し取り組ませることにより、その後の「習得」場面や他教科の活動の際にも、児童自ら「9つの資質・能力」とその学習方法を発揮する姿が見られるようになった。また、学習方法を自ら選んで実行する経験を積むことは児童に自信をもたらし、学習面だけでなく生活面においても主体的かつ積極的に取り組む姿が多くなった。これらは大きな成果だと感じる。

一方で、課題として感じる部分がある。

一点目が、試行させたい学習方法とそれに合った学習活動が合致するタイミングを組むのが難しいということである。児童の実態に合わせてつけたい資質・能力とその学習方法を見出したとしても、それらを試行する場面がなければ育むことが難しい。そのような場面や学習活動を設定することは可能であるが、今までの学習の流れに沿わない部分で生じてしまう可能性があるため、無理には設定することは望ましくないと考える。そのため、児童の様子と学習の展望の双方を考慮し、どの場面でどの「9つの資質・能力」と学習方法の定着を図れそうなのかを考える必要がある。

二点目が、ふり返りやフィードバックの時間の確保が難しいところである。「試行」の段階で、そのときに使用した学習方法がその時間にどう機能したのかをふり返させることは非常に重要であり、それらの繰り返しが「習得」・「活用」へとつながると思う。しかし、限られた授業時間の中でそれらを組み込むとどうしても時間が伸びてしまったり、活動を行う時間自体が短くなってしまったりするなど、タイムマネジメントの難しさを感じる。この点に関しては、効率の良いふりかえりやフィードバック方法を作り出す必要があると感じた。

今後は、様々な学習方法に取り組ませるだけでなく、適したタイミングと形で児童にふり返りをさせ、フィードバックを与えられるようにしていきたい。

5年2組の実践

吉木 寿充

1. 5年2組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の共有

(1) 単元について

今年度の5年生における総合的な学習の時間は、観光を題材とし学習を進めていった。本題材においては、金沢市の観光の現状や特色を調べ、観光の充実に向けた取り組みを行うことを通して、観光に携わる人や金沢市を訪れる人の思いや願いに気付くとともに、多様な方法で情報を収集・整理・分析しながら、金沢市の観光をよりよくするための方法を粘り強く考え、それらを自らの生活や行動に生かすことをねらいとしている。

「金沢が2025年に訪れたい観光地25選に選ばれた」というニュースを知り、「なぜ金沢が選ばれたのか」を自分たちの生活経験をもとに予想し、考えを出し合った。その後、本当に観光客が来ているのかをたしかめるために金沢駅でアンケートやインタビューを実施した(資料1)。調査した結果を整理・分析していくうちに、「なぜ東京や京都ではなく金沢なのか」「どんなきっかけで金沢を選ぶのか」「どんな目的で訪れるのか」といった新たな問いがうまれていった。個々にインターネットや観光雑誌などから情報を収集し、金沢駅、兼六園、近江町市場で観光客に直接話を聞くこととした。様々な媒体で情報を収集することで多面的に考察することにつながった。1学期の学習を通して、金沢市が世界から注目される観光都市であることを誇らしいと思う考えが多く聞かれた。その反面、観光客が増加することで起こる諸問題に対する考えも出てきた(資料2)。交通渋滞が発生すること、ルールやマナーの問題など実生活で感じている不便さも児童は考えとしてもっていることが分かった。2学期以降は児童自身が「観光」をどうとらえていくかを重要にしながら学習を展開していく必要性があった。



資料1 インタビューの様子

金沢市が世界から注目され、たくさんの観光客が来ていることを知って嬉しく思った。確かに学校の行き帰りで外国人観光客もたくさん見かけていた。でも、外国人観光客が増えてバスが混んだり、値段が高くなったりするのは困るなどと思った。

資料2 A児のふりかえり

まず、「観光業に携わる人たちは観光に対してどんな思いをもっているのか？」という問いを立て、解決することとした。金沢市を中心に文化体験事業を展開している株式会社はくの山田滋彦氏をゲストティーチャーとしてお招きした(資料3)。山田氏の観光に対する思いを聞き、児童は観光に対する新たな見方を獲得しているようであった。児童は、観光が単に人を呼び込むための手段ではなく、地域に受け継がれてきた文化や技術に光を当て、次の世代へとつないでいく役割をもっていることに気が付き始めた。また、価値があっても知られなければ失われてしまう文化がある



資料3 山田滋彦氏を招いての授業の様子

ことを知り、観光が文化の保存や継承にかかわる営みであるという認識を深めていった。このように観光に対して多面的に考察することを通して「金沢市が誇るべき文化であり、まだあまり知られていない文化を広めるために自分たちにできることは」という探究課題を掲げ学習を進めていくこととした。まず、金沢に存在する文化資源を整理し、「食」「建物」「工芸品」「その他」の категорияに分けた(資料4)。それぞれの良さを見いだすための共通指標として、児童の話合いから「歴史・伝統がある」「金沢ならではの」「見た目が美しい」「努力している人がいる」の四つを価値の基準として設定した。この基準を共有することで、文化のとらえ方に共通性をもたせ学習の出発点をそろえることができた。また、担当するカテゴリーごとに観光客への認知度調査の計画を立て、質問内容、観光客への声かけの仕方などをグループで検討した。金沢駅で実地調査を行い、「知らない・聞いたことがある・知っている」の三段階で認知度を尋ねた。児童は予想と異なる結果にふれることで、データを基に考えることの大切さを実感していた。



資料4 文化資源のカテゴリー分け

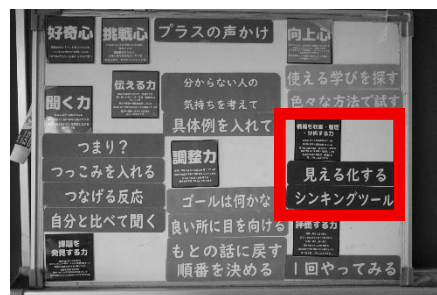
調査後は結果を整理・分析し、認知度と価値基準の関係を読み取る活動を行った。価値が高いと評価されながらも認知度が低い文化があることに気付くなど、文化の広め方に関する新たな課題を見付け出す姿が多く見られた。詳しくは(2) 試行・習得・活用で詳しく述べる。

今後は、児童が「あまり認知されていないが価値が高い」と判断した文化に焦点を当て、それらをどのような方法で広めていくことができるのかを考えていく。その際、発信のしかたや内容を検討するだけでなく、「自分たち一人一人は、観光とどのように関わっていくことができるのか」という視点を大切にしたい。観光客と出会ったときのふるまいや、日常生活におけるマナーやルールへの意識、地域の文化に対する関心のもち方など、自らの行動と結び付けて考えることで、観光を自分事としてとらえ、学習の成果を今後の生活に生かそうとする姿を育てていきたい。

(2) 試行・習得・活用

「試行」を中心に、情報を収集・整理・分析する力に着目して取り組んだ実践を紹介していく。

教科の学習を通して様々な学習方法を獲得してきた。各教科で獲得してきた学習方法を汎用化することで、どの教科、どの単元でも活用できることをねらった(資料5)。本時までに情報を収集・整理・分析する力において獲得してきた学習方法は、見える化する、シンキングツールの二つである(資料5)。



資料5 汎用化された学習方法

シンキングツールを試行する実践について述べる。本時のねらいは「金沢市の未来に残したい文化を探するために、座標軸を用いて集めた情報を整理・分析することができる。(思考力・判断力・表現力等)」である。観光客への認知度調査で得られた結果と、金沢が誇る文化や歴史について調べた情報をもとに座標軸を用いて話し合った。導入では発揮したい「9つの資質・能力」である「情報を収集・整理・分析する力」を意識付けた。そのためにどの学習方法を活用するか問うと、シンキングツールが出

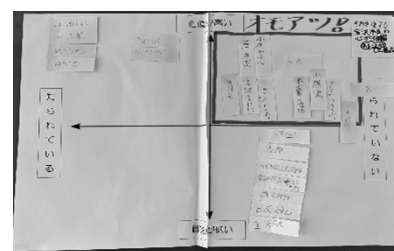
てきた。2軸を用いて話し合う場面を意図的に設定することで必要感をもって学習方法を選択することができた。児童は四つのカテゴリー（食 建物 工芸品 その他）ごとに小集団に分かれ、今まで調べてきた情報を出し合いながら座標軸に大切にしたい文化を位置付けていく（資料6）。座標軸は横軸に「認知度」、縦軸に「大切かどうか」とした。児童は見通しをもって学習を進めることができていた。認知度は事前にとっておいたアンケートの結果や街頭インタビューで得た情報をもとに話し合うことができていた。「大切かどうか」においては（1）で述べた四つの価値の基準をもとに座標軸に位置付けていた。しかし、この四つの価値基準は学級の共通価値であるが、個人差が大きいものもあった。その一つが「見た目が美しい」という基準である。工芸品を担当したグループでは金沢市の伝統工芸である大樋焼が美しいかどうかを話し合っていた。写真を見て美しいかどうかを判断している児童もいれば、長い歴史や職人さんの技術に目を向けている児童もいた。ここで全体交流の場面を取り、「見た目が美しい」という価値基準について確認する時間を設けた。価値基準を設定した掲示物を確認し、美しさは好みもあるが、歴史や伝統、努力している人がいることが美しさにつながっていることを再確認した。この時間を取ることで工芸品のグループも調べてきた文化を座標軸に位置付けることができていた。



資料6 座標軸を用いた話し合い

授業の終末では、各グループの座標軸を出し合い、金沢市が誇るべき文化であり、まだあまり知られていない文化を見付けることができた（資料7）。今後は自分たちにできることは何か探究していくことになる。

本時のふりかえりでは、多くの児童が「情報を収集・整理・分析する力」を発揮することができたと回答していた。導入で意識付けることや、本時のねらいと合致している学習方法で試行させたことが発揮につながったと考えられる。またB児は「調整力」の学習方法である「ゴールはなにかな」を使い、小集団での話し合いをうまく進められたと振り返っている（資料8）。本時に試行したい学習方法とは異なるが、児童が学習方法を選択して活用する姿は今後の「習得」や「活用」のフェーズに迫っていると考えられる。このような姿を価値付けながら学習方法の活用を習熟させていきたい。



資料7 座標軸を用いた話し合い

今日は座標軸を使って文化を見付けることができました。情報を収集・整理・分析する力も付いたけど、調整力も付いたと思います。話がずれた時に話を戻すことができたからです。「ゴールは何かな」を使えたと思います。

資料8 B児のふりかえり

2. 成果と課題

本実践を通して、学習方法の定着は児童の経験量だけでなく、教師の関わり方によって大きく左右されることを実感した。特に、「試行」「習得」「活用」という段階を固定的にとらえるのではなく、学習の中で往還しながら育っていくものとして捉える必要性を学んだ。1時間の学習の中においても、すでに学習方法を身に付けている児童と、試行の段階にある児童が混在することを前提に指導を構想すること

が重要であると気付いた。

これまでの指導では、児童の主体性を尊重するあまり、学習方法を効果的に活用している姿を積極的に価値付け、全体に広げる働きかけが十分でなかった。しかし、実践を重ねる中で、児童が自然に行っている工夫や思考の仕方を教師が意図的に取り上げ、価値付け共有することこそが、他の児童の「試行」を促し、学級全体の学びを高めることにつながることを学んだ。

また、学習方法は「とにかく使えば身に付くもの」ではなく、学習の目的や場面に応じて選択されることで初めて意味をもつという点にも気付かされた。教師が学習方法を提示する際には、使用の仕方だけでなく、「なぜこの場面でこの方法が有効なのか」という必然性を明確に伝える必要がある。児童がその有用性を実感できなければ、自ら選び、継続的に活用する学びへとはつながらない。

さらに、学習方法の定着を図る上では、教師自身が児童の姿を見取り、評価する視点を更新し続けることが求められると感じた。教師の促しによって活用したか否かに関わらず、学習方法を用いて思考を深めようとしている姿そのものを価値付けることで、児童は安心して挑戦し、学び方を広げていくことができる。

本実践を通して、教師は学習内容を教える存在であると同時に、児童の学び方を育てる存在であることを改めて認識した。今後は、児童の「試行」を受け止め、「習得」へとつなぐ橋渡し役としての教師の在り方を意識しながら、学級全体の学びを支えていきたい。

5年3組の実践

岩澤 孝典

1. 5年3組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の活用

(1) 単元について

今年度の総合的な学習の時間は、金沢市を訪れる外国人観光客（以下インバウンド客とする）がなぜ増加傾向にあるのか、何を目的に金沢市に来るのか、探求的に学ぶ題材である。

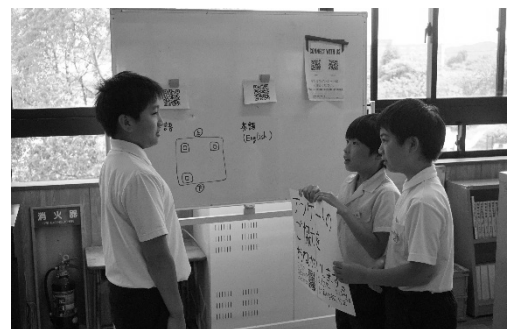
金沢の歴史は古く、戦国時代から江戸時代にかけて加賀百万石の城下町として日本第4位の大都市として栄えた。前田家は藩の財力を活かし、全国から名高い名工や文化人を招聘し、金沢の地で日本の伝統を保護・発展させた。また、第二次世界大戦で空襲を受けなかったことから、今でも市街地に江戸時代の歴史的遺構や歴史的建造物が残る。現在でも、都市景観条例等の条例を制定し、その歴史的町並みの整備や保存に努めている。そんな金沢市が2024年にアメリカの旅行メディア『NATIONALGEOGRAPHIC』による「Best of the World 2025（2025年に行くべき世界の旅行先25選）」で選出された。しかし一方で、金沢市経済局観光政策課の調査によると、観光客に対し、旅行者のマナー違反对策や公共交通の混雑対策に対して早急に取り組んでほしいとの声があがっている。よさと課題の両面から課題解決に向けた方策を模索することができ、様々な視点から観光都市金沢を見つめることができる題材である。今住む金沢を観光という視点から見つめ、未来の金沢の姿を考えることをねらいとしている。

金沢市が25選に選ばれたことを紹介すると、嬉しいというより驚いていた児童が多かった。また、すぐに「なぜ選ばれたのか。」「選ばれるだけの魅力が金沢市にあるのか。」といった疑問をもつ児童が多かった。話合いの結果、この疑問を解決するためにインタビューすることにした。相手が外国人ということもあり、質問したいことを英語に翻訳しアンケートを作成したり、少しでも自分たちの聞きたいことが伝わるように看板やパンフレットを自主的に作成するなど、各々で必要と思う準備を進めていった（資料1・資料2）。また、アンケート内容は「なぜ金沢市に来ようと思ったのか。」「どこから来たのか。」など、児童自身が聞きたいことを設定した。さらに、内容だけでなく、質問のしかた（選択式か記述式）も児童に考えさせた。結果をクラスで共有し、分析・整理を行った。1学期は計2回金沢駅でアンケート調査を行った。調査自体はうまくいったが、集計の段階で時間がかかってしまった。選択式の回答が全て英語であり、日本語に翻訳してからまとめないといけなかったため、時間がかかってしまった。また、記述式の回答を翻訳にかけた際、うまく訳してくれなかったものもあったため、調べる時間がかかってしまった。調査する際の課題として共通認識して1学期を終えた。1学期を終えた時点で、インバウンド客が来る理由として「日本風の文化に触れに来たのではないか。」「金沢の食を求めてきたのではないか。」「都会とを結ぶ交通手段が豊富にあるからではないか。」と、三つに絞ることができた。

2学期も1学期同様、インバウンド客が来る理由についてさ



資料1 手作りの看板を作る様子



資料2 インタビューの練習を行う様子

らに絞ることをゴールとして進めていった。生の声を聞きたいとの声がたくさんあり、アンケートをとることとした。目的が1学期より明確であったため、場所を変えることとした。結果、金沢駅からひがし茶屋街に変更になった。これは、1学期の成果である「日本風の文化」と「金沢の食」の二つが共通する場所として、ひがし茶屋街が一番当てはまるのではないかと話合いで決まったからである。話合いの場面では、クラゲチャートやボーンチャートなど、様々なシンキングツールを活用して意見をまとめる学習を進めてきた。また、1学期の課題を解決するため、調査の仕方も改善した。インバウンド客に考えてもらった回答をシールで貼ってもらう形式に変更した。より簡略化した、効率を重視した方法を学ぶことができた。調査中も「金箔ソフトがダントツで多いよ。」「加賀野菜はまったく知られていないよ。」など、途中でシールを見て分かるため、とても意欲的に活動を進めていた。調査結果を整理する場面でも、結果が一目瞭然で分かり、とてもまとめやすそうだった(資料3)。2学期は、ひがし茶屋街で2回調査を行った。計4回の結果から、インバウンド客の目的が「金箔が目的で来たのではないか。」「金沢の食が目的で来たのではないか。」と2つに絞ることができた。金箔ソフトや金箔をまぶした和菓子が多いことに着目し、「金箔が使われている食を求めてきているのではないか」と疑問をもった児童が多かったため、片町にあるレストランのシェフに聞くこととした(資料4)。そこで、「金箔は料理にはあまり使われないこと。」や「見た目より味や食材、旬を大切にしていること。」など、予想外の答えが返ってきたので、児童はとても驚いていた。逆に、さらに課題意識をもつことができた。そこから、「自分たちの考えた金沢の食を発信しよう」という学習のゴールが生まれた。



資料3 効率化されたアンケートを整理する様子



資料4 金沢の食について学ぶ様子

(2) 試行・習得・活用

「試行」場面を中心に、調整力や情報を収集・整理・分析する力に着目して取り組んだ実践を紹介したい。

本時は、インタビューで集めた情報を整理・分析する時間である。これまでも、考えたことをまとめる手段としてのシンキングツールを活用して、自分たちの考えを整理・分析する学習を進めていった。それぞれのツールのよさを確認しながら、実際に使ってまとめる学習を行った。ツールをそのまま使うだけでなく、話合いの中心部分を丸で囲んだり、メモを隅にとりながらまとめ、自分なりにツールを活用する姿が見られた。アンケート結果を整理する際、どのツールを使うか児童に選択させ、まとめさせた。いくつかのグループに分けて紹介する。

Aグループは金沢の食について調査した。タブレット上で表を作成、集計していた。話し合いたい視点を明確にして、気付いたことを色分けして整理していた。最初は得票数から「歴史」が関係しているのではないかという視点で話合いを進めていたが、「それなら和菓子も一定数人気があるはずなのにあまり票が伸びなかった」ことに気付いていた。また、金箔アイスの得票数がどれよりも一番多かったことから、

新しい「知名度」という視点に切り替えて話し合いを発展させていた。単純にSNSや旅行雑誌で取り上げられているかそうではないかで票が分かれるのではないかと予想を立てていた（資料5）。

Bグループは調査結果をそのまま受け止めずに整理、分析していた。「歴史」の得票数が多かったわけについて考えていた。得票数が多かった項目と調査をする際に使った写真が関係しているのではないかと分析していた。よく使われる金沢の写真とインバウンド客がもつ知識と関連付けながらアンケートに答えたのではないかと分析していた。調査をする際の写真を選ぶことが結果を左右する要因ではないかと考えていた（資料6）。

Cグループは一つの結果に絞り、積極的に予想を立てていた。金箔アイスがなぜ一番得票数が多かったのか、インターネットの記事を検索しながら分析していた。金箔ソフトがSNSで数多く取り上げられていることや、金箔を使用していることでの高級感がインバウンド客を魅了するのではないかと話し合っていた（資料7）。

中には一人で整理、分析していた児童もいた。これまでに習ったシンキングツール（今回はクラゲチャート）を使ってじっくり考えていた。結果から具体的に分かったことを付箋でまとめることから始め、集まった付箋から抽象化された考察を考える姿が見られた。自分自身が決めた視点に沿って丁寧にじっくり考える姿が見られた（資料8）。

このように、考察するための方法を自己決定し、整理、分析する意欲的な姿が見られた。特にグルーピングすることなく、同じ目的意識をもった児童が自然と集まり、整理、分析を進めていた。この学習から歴史文化や食に対してインバウンド客が興味をもっているのではないかと、方向が絞れてきた。

上記の実践は3回目の調査をもとに学習を進めていった実践である。4回目の調査結果を同じように整理・分析する学習では、既習の流れを意識することができた児童が多く、これまで使った学習方法から自分自身で選択し学習に取り組む「習得」を意識した学習を進めることができた。大課題が設定された3学期は「活用」を意識した授業を展開していきたいと思う。大課題が設定されたことで、最後のゴールが明確になる。児童にとってもこれまでと違って、ゴールがはっきりしている分、どのような活動をつなげていけば大課題が解



資料5 色を使い分けてまとめる様子



資料6 視点を意識して表にまとめる様子



資料7 予想を出し合い整理する様子



資料8 シンキングツールを使って整理する様子

決できるかイメージをもちやすいのではないかと考える。これから実践をさらに進めていきたい。

2. 成果と課題

本学級では、「予想→調査→整理→分析→予想」と、同じ大きな探求サイクルを4回も回す学習の流れとなった。この学習の流れによって、児童は課題とゴールをより明確に意識することができたのではないかと考える。次の学習活動がイメージしやすく、見通しをもって学習に取り組むことができたのではないと思う。また、同じサイクルを繰り返し行ったことで、3回目の試行の実践から4回目の習得の実践へとつながっていったと考えられる。また、改善を加えながら学習を進めることができた。前述したが、事前準備やアンケートの取り方など、学習方法に対する課題を解決しながら学習を進めることで、より簡素化、効率化した調査を行う力をつけることができた。事前準備の様子では、調査項目に見合った写真を貼ってよりイメージをもってもらおうと考えるグループが見られたり、フローチャートのような調査ボードを作るグループが見られたりするなど、回答してもらおうインバウンド客のことを考えて作成する様子が見られた。また、調査ボードに貼る写真も何枚かの候補からじっくり選ぶ様子が見られた。さらに、学習に対して自由に考えられる児童が増えてきた。最初はどうしてもシンキングツール（既習）を生かした学習を進める児童が多く見受けられたが、「試行」を数回行うことで、「次は、こんな風にまとめてみたいな。」「自分ならこんな風にまとめるけどな。」など、自由度を徐々に上げていくことが「習得」の学習へとつながっていくものと考えられる。研究授業からも、自由に書いたり、まとめたりしたい児童にとってはツールより、時間はかかるものの一から表やグラフを作成したい様子が見てとれた。これも、同じ探求サイクルを繰り返し学習できたからではないかと思う。他教科でも、ある程度自由度（話し合いの方法を選択させるなど）を取り入れたことで、教師に頼ることなく学習を進める姿も見られるようになってきた。何度も繰り返し学習することで、児童の中で自由度を増したい気持ちが高まり、学習への意欲が高まったのではないかと考える。

課題としては、長所ばかり認める声かけをしてしまったことである。どんな学習方法でも、長所だけでなく短所もある。例えば、ピラミッドチャートを例にとると、付箋を活用することで最初から最後まで見やすいツールとして使える反面、どんな視点で絞っていくか課題に沿った形で決めないといけない短所もある。児童と一緒に長所だけでなく短所も確認することで、どんな時に使ったら一番いい学習方法なのか判断できるようになり、最適解を考えながら学習を進めることができる児童が育成されていくと考える。他教科でも様々な学習方法の長所と短所を児童と一緒に確認しながら進めていきたい。また、児童の見取りが弱かった点が課題であった。「試行」と「習得」のどちらを身につけさせたいか、もう少し児童理解をしておく必要があった。研究授業では、「試行」を想定して授業展開したが、児童の様子を見ると「習得」の場面を想定してもよかったのではないかと考えた。整理する場面でも、教師側として想定していなかった方法を自由に考えて整理しようとする児童が数多く見受けられた。また、同じ学習方法でも、色分けするグループや意見を中心にまとめるグループなど、様々な整理の仕方をしてきた。教師が思っていた以上に自由な発想で学習を進める様子が見られた。児童理解が少し甘かったように思えた。小さな児童の変化をしっかりと見取り、授業に反映させていきたい。

6年1組の実践

宮野 広光

1. 6年1組における9つの資質・能力発揮のための学習方法の活用

(1) 単元について

本単元「尾張町商店街の Nice Guy」は、尾張町商店街を題材に、商店街で働く人や利用する人との関わりを通して、地域を身近な存在としてとらえ直し、商店街の活性化に向けた方策を考えていくことをねらいとして設定した。児童が地域に足を運び、人と出会い、話を聞く体験を重ねることで、地域を「場所」として知るのではなく、「人との関係の中で成り立つ場」としてとらえることを重視している。

本単元で尾張町商店街を扱うにあたり、教師自身が感じていた魅力は、店や建物といった外面的な特徴よりも、そこで働く人の存在であった。商人一人一人が来訪者との関係を大切にしながら商いを続けている姿に触れる中で、商店街の価値は、人との関係性の積み重ねによって支えられているととらえた。そこで、商店街を身近な存在として感じるためには、商人と出会い、思いや工夫に直接触れる経験が不可欠であると判断し、本単元では「商人」に焦点を当てた学習活動を構成した。

単元前半では、「商人を探せ」の活動を二度行い、児童が商店街を歩きながら商人と直接関わる機会を設けた。初回は、声を掛けることや質問をすることに戸惑いが見られ、事前に考えた質問をそのまま読む姿も多かった。しかし、回を重ねるごとに、商人との触れ合いを楽しみ、話の流れに応じて質問を変えたり、相手の話に反応したりする姿が増えていった。商人の仕事への思いや日々の工夫に触れる中で、商人との出会いそのものに価値を見いだす姿が見られるようになった（資料1）。



資料1 「商人を探せ」を楽しむ児童

一方で、活動を重ねる中で、体験を楽しむことはできても、その意味を自分事としてとらえ直し、次の行動につなげていくことには課題が見られた。商人との触れ合いが印象に残っていても、「なぜこの活動をしているのか」「自分たちは商店街に対して何ができるのか」といった問いにつなげることが難しく、体験が感想にとどまりやすい実態があった。

また、商店街を地域の一部としてとらえることはできていても、自分たちの生活とのつながりや、これからの商店街との関わり方までを見通して考える姿は十分とは言えなかった。体験の積み重ねが、そのまま課題意識や探究の問いへと結び付いていない点に、本単元の出発点としての課題があるととらえた。

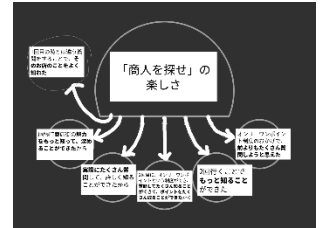
そこで本単元では、商人との触れ合いを単なる体験で終わらせるのではなく、その意味をふり返り、今後の学習につなげていく場面を意図的に設定した。活動を自分事としてとらえ直し、「商人との触れ合いを通して、商店街をどのようにしていきたいのか」という問いをもつことで、児童が主体的に探究を進めていくことをねらいとした。また、その過程において、9つの資質・能力の発揮につながる学習方法を明示し、試行的に用いることで、体験を学びへとつなげる力を育成していくことを目指してきた。6年生という発達段階を踏まえ、体験を通して得た実感をもとに、相手の立場や思いを想像しながら学びを深めていくことができるよう、本単元では「ふりかえり」と「見通し」を重視した学習構成と

した。地域と関わる学習を通して、商店街の未来を一方的に考えるのではなく、商店街の人とともに考えていこうとする姿を育てていきたいと考えてきた。

(2) 試行・習得・活用

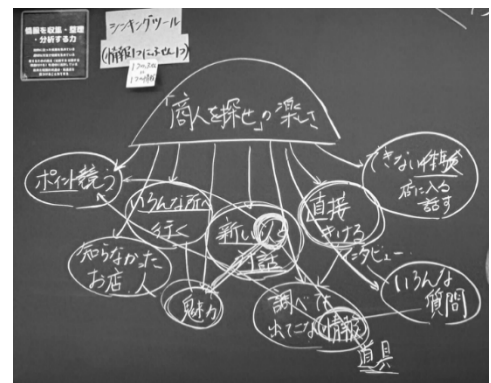
本実践では、「9つの資質・能力」を発揮するための学習方法の活用を、「試行」「習得」「活用」の三段階でとらえている。本時は、教師が学習方法を明示し、「この学習方法を使って考える」ことを意識させる「試行」の場面として位置付けた。単元を通して、学習方法を十分に蓄積してきたわけではなく、児童が自律的に使いこなす段階には至っていないことから、本時を「習得」や「活用」ではなく、「試行」の段階と判断した。

本時で明示した学習方法は、「シンキングツールの活用」と「相手のことを考える」の二つである。商人との触れ合いを通して得た体験をふり振り返り、今後の学習の見通しをもつためには、体験を整理し直すことと、自分たちの活動を相手の立場からとらえ直すことが必要であると考え、この二つの学習方法を取り上げた。



資料2 シンキングツールで話し合う児童と実際

授業の前半では、「商人を探せ」の活動をふり振り返り、シンキングツールを用いて活動のよさを整理した(資料2)。シンキングツールを活用することで、体験をもとに活動のよさを分析しようとする姿が見られ、手だてとして一定の有効性があった。一方で、何を書けばよいか分からず言葉が止まる姿や、出来事を次々と書き出すものの関係性をとらえられず事実の羅列にとどまる姿が見られた。板書においても意見が並列的になり、考えのつながりを十分に可視化するまでには至らなかった(資料3)。このことから、体験を整理する場面では、学習方法を示すことに加え、目的に応じて整理のしかたを意識させる必要があることが明らかになった。



資料3 シンキングツールをまとめた板書

次に、「相手のことを考える」という学習方法を用いて「これから尾張町商店街がどんな商店街になったらよいか」という理想を考える場面を設定した。この場面では、商人一人一人の立場に立った意見だけでなく、商店街全体や来街者の立場からの意見も出され、相手の立場を想像しながら考えようとする姿が見られた。児童からは、「何回も来られてうんざりしているのではないか。」「あまり人が減ってほしくない。」「若い人にも来てほしい。」といった声があり、相手の思いを想像しながら、商店街の状況をとらえようとする姿が見られた。

一方で、商店街のこれからを考える場面では、教師が想定していた「商店街の人がどのように将来を思い描いているか」を考える方向から、「催し物を開く」「チラシやSNSで広める」といった、商店街と自分たちが今後どのように関わっていくかを考える方向へと思考が広がっていった。これは、教師の指示が十分に焦点化されていなかったことによる面もあるが、同時に、児童が商店街との関わりを自分事としてとらえ、主体的に関与しようとする発想の豊かさの表れでもあった。

2. 成果と課題

本実践の成果として、児童が商人との触れ合いを重ねる中で、商店街を身近な存在としてとらえ直していった点が挙げられる。「商人を探せ」の活動を二度行ったことで、商人一人一人の思いや工夫に直接触れる機会が増え、商店街を単なる場所としてではなく、人との関係によって成り立つ場としてとらえようとする姿が見られた。回を重ねるごとに、商人とのやり取りを楽しみながら関わろうとする姿が増え、地域と関わる学習を自分事として受け止める姿につながっていった点は、本実践における成果である。

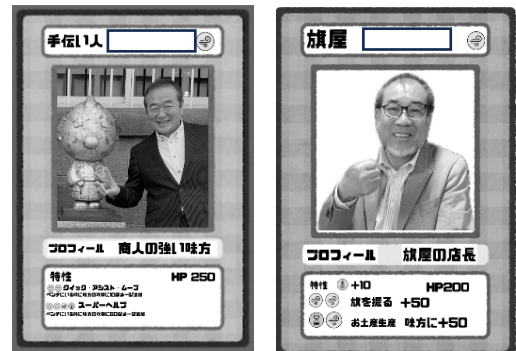
また、商店街を活性化させるための具体的な手だてとして、商人トレーディングカードを作成するという構想が生まれたことも成果の一つである。商人トレーディングカードには、商人の人柄や仕事への思い、店の特徴などが反映されており、児童が商人との触れ合いを通して得た情報や印象をもとに構成されている（資料6）。単に情報をまとめるだけでなく、「集めたい」「また来たい」と思ってもらうための工夫を考える中で、商店街と自分たちとの関わりを具体的にイメージすることができていた点は、学習の広がりを示す姿であった。

さらに、授業者が「9つの資質・能力」という視点を意識して授業を構想したことで、活動や発問、板書の意味を、児童にどのような力を働かせたいのかという観点から整理することができた。その結果、教科やこれまでの学習とのつながりを意識した授業づくりが進み、児童においても、他教科で身に付けた考え方や学び方を生かそうとする姿が見られた。学習を単元内に閉じるのではなく、これまでの学びと結び付けてとらえようとする姿が見られたことは、本実践の成果である。

一方で、課題も明らかになった。6年生としては、学習方法を習得し、活用する段階まで高めた探究を行いたいと考えていたが、これまでの学習において、学習方法を意図的に扱い、蓄積してきた回数は十分とは言えなかった。そのため、本時では学習方法を明示し、試行的に用いる段階にとどまり、学習方法を安定して用いる姿を十分に引き出すことはできなかった。

授業の中では、「習得」や「活用」ととらえられる児童の姿が見られたものの、それらは必ずしも、その時間に授業者が掲示し、児童と共通理解した学習方法を意識的に用いた結果とは限らなかった。商人トレーディングカードの作成においても、商人の思いをとらえようとする姿や、相手の立場を意識した工夫は見られたが、それが共通理解した学習方法を意識的に活用した結果であったかどうかについては、慎重にとらえる必要がある。本研究で定義した「共通理解した学習方法を用いる」という意味での「習得」「活用」にまで至らせることの難しさが課題として残った。

また、探究のプロセスにおいては、課題設定に時間をかけて問いを深めることの重要性と、単元全体を見通して活動を進めていく必要性との両立が課題となった。課題設定に十分な時間を確保しようとする、その後の活動や成果物づくりまで十分に回し切ることが難しくなる一方で、早く次の段階へ進めると問いが浅くなるという難しさがあった。問いの深まりと探究の進行をどのように両立させていくかは、今後の単元構成を検討する上での課題である。



資料6 商人トレーディングカード